

「古くて新しい川越」 を目指して

（社）小江戸川越観光協会

表通り
裏通り



札の辻交差点近くに移動してから、訪れる観光客の数も数倍に増えました。
英語・フランス語・中国語など、6つの言語で書かれたパンフレットも用意しています



川越市観光協会が発足したのは昭和三十四年、会員は六十人で、事務局は商工課に置かれていました。平成十六年に社団法人となり、名称を小江戸川越観光協会（以下「観光協会」）に変更。そして七月二十八日、観光客の利便性を考え、札の辻交差点近く（元町一丁目）に移転しました。現在の会員数は約五百人。市の観光をさらに活性化するために、観光協会が果たす役割は数多くあります。この記事では会長の岩堀弘明さんに、観光協会が目指す川越観光の将来像などについて伺いました。

観光協会はどうな仕事をしているの？

観光紹介・観光客誘致など、観光における川越市の顔として頑張っています。観光客誘致のためメディアに情報提供したり、関東だけでなく東北地方にも宣伝に出かけたりしました。独自にホームページ（<http://www.koedo.or.jp/>）や情報誌も作成しています。また、川越の優れた商品を認定する「小江戸川越ブランド商品」の認証も手がけています。

日本各地の観光地の情報を把握し、優れた事例を会員の皆さんに発信していく役割も担っています。これからの観光の理想像を考え、まずは総合的な窓口となる事業に取り組んでいます。

最近力を入れている事業は？

観光ルネサンス事業です。これは国土交通省が実施している、国際競争力のある観光地づくりをする民間組織などを支援するものです。川越では、観光協会が事務局となり①小江戸川越文化参加・体験事業②川越ならではの「食べる楽しみ」の提供事業③「川越小判」の利用・活用によるまち巡りの演出事業④観光客と市民の交流の場創出事業⑤多言語WEBサイトによる情報発信力強化事業⑥川越プロモーション映像コンペによる川越PR事業⑦市民総コンシェルジュ化事業⑧多言語表記による案内標識などの整備。これらの事業を行っていきます。

市民にとって、観光協会とは何ですか？

「観光地の住人はその観光地を知らない」。よく聞く話ですが、それは観光地としての魅力を知らないからだと思います。そこで、川越は共有情報を増やしていきます。観光協会が市民と市民・市民と行政を結ぶ情報伝達の道具として活躍し、情報をできるだけ多くの人が共有できるようにします。市民の皆さんは情報の伝達によって川越の魅力を理解し、観光への関心が増えてくると考えています。

観光協会が目指す、川越観光の将来像は？

観光は「まちづくりの総仕上げ」ともいわれています。行政や各産業の関係機関と一体となり、活力ある観光の輪を広げていきたいですね。



観光ルネサンス事業の一環として行われた留学生などによる山車の体験曳き

私は、観光客の皆さんはさまざまなる欲求を満たすため、観光地を訪れるのだと考えています。その欲求を満たすことができる「何度来ても新しい発見がある川越」を目指したいですね。



路上喫煙防止のPRとして行われた太鼓の演奏。雨の中響き渡る音色に、人垣ができていました

たばこの火って、怖いんです

9月30日、アトレビル北側出口前で「川越市路上喫煙の防止に関する条例」完全施行式典が行われました。喫煙マナーの向上を呼びかけるために、小学生中心の「和太鼓響」が勇壮な演奏を披露。道行く人も足を止めて聞き入っていました。安心して歩けるまち、吸い殻のないきれいなまちを実現するため、喫煙者の皆さんの協力をお願いします。



式典終了後、啓発活動を行いました

吹奏楽で、中学・高校の交流

「武蔵野ふれあいの森コンサート」は、高階・福原地区の高階・高階西・寺尾・福原中学校と川越初雁高校が合同で行う吹奏楽のコンサートです。6回目となることは、10月8日にジョイフルで行われました。演奏が終わるたび、満員の会場からは盛大な拍手。演奏を終えた子どもたちの顔は、少し誇らしげに見えました。



最後は、参加校全員総勢130人による合奏。会場も、手拍子で演奏に加わりました

小さな自然、みつけた

特別養護老人ホームみなみかぜ（吉田）の敷地内に、ビオトープが誕生しました。ビオトープとは、生き物がそのままに生活できる場所のこと。わき水と雨水を利用している小さな池では、メダカの姿を見ることができます。周囲の草花も含めて、地域の皆さんがボランティアで維持管理を行っています。今後は、ホテルの舞う池にしたいそうです。来年が楽しみです。



メダカを見つけると、思わず笑みがこぼれます

やさしい音に、癒されて

10月6日、川越オカリナ会「ぼぴー」による初めての演奏会がクラッセ川越で行われました。この日は20曲を熱演し、最後は満員の観客の皆さんからアンコールの声。会長の眞橋正治さん（68歳・霞ヶ関北2丁目）は「緊張しましたが、たくさんの方が来てくれてうれしかったです。今後でもいい音を作っていきたいですね」。



月3回の活動を6年半、1度も休まず続けてきた成果を披露

山車製作に向けて、第一歩

南 通町は山車を市外から借りて、川越まつりに参加しています。このたび山車の車輪・車軸を町内の横溝長寿さんから寄贈されたため、合わせて雪桁を製作し、10月19日に披露。予定している山車人形にちなみ、雅楽「納曾利の舞」の演舞も行われました。自治会長の吉田光雄さん（60歳）は「町内の夢の第一歩を踏み出すことができました」と満面の笑み。



『納曾利の舞』の演舞



曳き綱が巻いてある、山車全体を支える部分が雪桁です